

週刊 武四郎

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
についてご紹介します

第19号

2018年(平成30年)8月15日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

謎の妻

武四郎さんは、とにかく若い時から探検……というか放浪(ほうろう)人生だったので、妻帯(さいたい)したのは遅く、四十二歳の時にへとうという女性と結婚しています。このとう夫人については、また改めてご紹介したいと思いますが、今回は武四郎さんの最初の奥さんについて……です。

武四郎さんは筆まめな人で、自伝をはじめ日々の記録をたくさん残していますが、なぜか最初の奥さんについては一文字も残していません。

でも、その最初の妻のお兄さん……三浦乾也(けんや)の方の記録、研究書の家系図には、ちゃんと武四郎さんは乾也の妹の配偶者として記されているのです。

「武四郎は、乾也の妹が気に入って、いきなり『もう料理も頼んできたから』と、その日のうち

に祝言(しゅうげん)を挙げてしまった」

と、語り残しているのは画家の石井鶴三(つるぞう)です(鶴三は中里介山(なかざとかいざん)の『大菩薩峠(だいぼさつとうげ)』や、吉川英治(えいじ)の『宮本武蔵(みやもとむさし)』の挿絵(さしえ)画家として有名)。鶴三の兄は、やはり画家の石井柏亭(はくてい)で、二人の父の石井鼎湖(ていこ)が三浦乾也の養子になったことから、乾也の妻の実家、石井家を継いだために二人は石井姓(いしゐけい)を名乗ることになりました。

た。この話は石井家に伝わった逸話(えいしやうた)なのでしょうが、鶴三が生



まれたのは武四郎さんの死ぬ前年なので自身の記憶ではないのです。ちょっと面白おかしく脚色(きゃくしやく)され過ぎているような気がします。

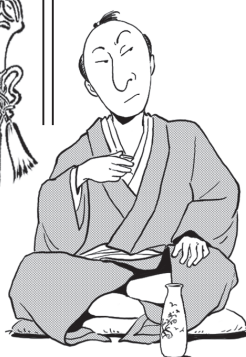
一方で三浦乾也の研究書には、結婚後「十日で死んだ」となっています。武四郎さんはいくらぶれた義兄(ぎけい)乾也を生涯(しや)を通じて援助(えんご)し続けたことから、離婚(りこん)したというより死別(しべつ)した、と考えた方が自然(しぜん)なようにも思われます。

実は、武四郎さんが最初の妻を娶(めと)った頃は、松前藩(まつまえはん)に命を狙(めが)われるという一番危ない時期でもありました。

もしかしたら、最初の奥さんは……？
いったい何があったのでしょうか。でも、病死(びやうじ)であれば武四郎さんのことですから、きちんと書き残すような気がするのです。そこには何か書き残したくない理由(りゆう)があったのかもしれない。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中！

